

大学入学までの作文経験実態に基づく大学生 へのライティング学習支援の報告

Report on writing learning support for university students
based on the actual situation of writing experience
until entering university

佐々木明子

SASAKI, Akiko

要旨

大学生活では、初年次教育におけるライティング科目や大学4年生での卒業論文、また就職活動における履歴書など「書く」ことが求められる場面が多々ある。一方で書くことを苦手とし、大学生としての作文として不適切な文章が多くみられる現状がある。

本稿では、学生の小学校から高校までの作文経験に着目し、学習指導要領の内容を基に大学生のライティングについて課題を明らかにした。課題へのアプローチとして個別指導室にて行ったライティング学習支援と、それに対する考察について報告する。

1. はじめに

大学教育において、入学後の「初年次教育」が重要視されている。大学生活では様々な場面で「書く」ことが求められるため、初年次教育では多くの大学でライティング科目が導入されている。明星大学にも初年次教育として「自立と体験1」やその他科目が設置されている。これに加えて筆者が所属する明星大学情報学部には初年次教育の1つとして「技術文書演習」という科目がある。大学におけるレポートや論文作成において必要な作文能力の基本を学ぶ科目である。本学部では学習サポートのために個別指導室を設置しており、「書く」ことの支援を行っている。技術文書演習の授業時間外での作文支援や就職活動における履歴書や卒業論文の文章作成支援も行っている。個別指導にて学生の作文を見ていると、技術文書演習を受講していても大学生の作文としては不適切な文章が散見され、ライティング力の向上がみられないまま履歴書や卒業論文に取り組んでいる学生が一定数いる。「ライティング」とはレポートや論文など一定量を伴う文章やスライドなどの視聴覚資料などの文書作成のことを指して用いられるが、本稿では特にレポート・論文作成

などの文章作成についてライティングという語を用いる。

1.1. 初年次にライティング力が低い学生の作文

技術文書演習では、大学におけるレポートや論文作成のための練習として演習を多く取り入れている。例えばテーマに沿った文章の作成や、他学生の書いたものを見て評価する相互レビューなどである。加えて、実験や論文などで使用する理系文書整形システムのLaTeXの演習も取り入れ、単なる文章作成だけでなく、それに関わるツールやシステムの演習も併せて行っている。

教科書は『日本語練習帳』と『図解でわかる！理工系のためのよい文章の書き方』の2冊を使用している[1][2]。日本語の細かな指導については前者の教科書を使用し、文章作成における基本事項については後者の教科書を使用する。日本語の細かな指導とは、例えば1つ1つの単語の意味を分かったうえで文章に用いること、文末表現は常体を使うこと、助詞の使い方を意識することなどである。文章作成の基本事項とは、レポートや論文を書く際に必要な文章の構成や説明の順番などについてである。

学生から提出されるレポートでは、常体・敬体まじりの文、「て・に・を・は」といった助詞の誤った使用、接続詞の誤用・多用、指示語の多用、体言止め、話し言葉の多用などが散見される。これらは1文章の中で何度も見られる。加えて字下げや段落がないものや箇条書きに近い文章も見られる。表1に学生の作文としてよく見られる典型的な誤りの例を示す。

文章の構成や論理の指導を想定している大学において、上記で触れたような助詞の間違いや話し言葉の使用は学生自身の気づきで直されることが想定されている。

大学の想定している作文能力に満たない場合、すなわち義務教育において身につけているはずの作文の基礎が身につかないまま授業期間を終えた場合は単位取得不可である。西垣[3]によれば学生のライティング能力は階段状に上昇せず、様々な学びの中で何をどう書くかという認識は常に化する。ライティング力は計画的かつ効率的に向上するものではないため、入学時点で差がある学生が週1回×15週の授業時間のみ学習しても単位取得は非常に難しい。

1.2. 3・4年次にライティング力が低い学生の作文

技術文書演習で見られた文章の誤りは履歴書や卒業論文でも同様にみられる。特に話し言葉と書き言葉の使い分けの誤りが多く、その区別が学生自身でつけられないことが多い。

また、履歴書や論文はレポートのような「報告」という意味合いではなく、「相手に伝える」というコミュニケーションとしての文章の役割があるため、書く上で前後の文脈や論理展開への意識が必要となる。履歴書では、限られた文字数の中で適切な単語を選び、自身のアピールと共に求められたテーマについて説明しなくてはならない。作文が苦手な学生は、テーマに沿った説明ができなかったり、起承転結の配分を適切にとることができず単なるエピソードの説明にとどまってしまったりということが多くみられる。卒業論文は文字量が多いため全体の論理展開が追えず、説明の順番が整わないことが多い。

表 1 学生のライティングによく見る誤りの例

誤用項目	例文	
話し言葉の多用	一人称に「自分」を使用	自分は昔から子供に関わる仕事に興味を持っていた
	ていて、していて、してくれて	社会では情報技術が使われていて、
	というと	なぜこの履修モデルを選択しようと思ったのかというと、
	したら	社会に出たら、大学で学んだことをいかし
助詞の誤使用	助詞の不適切な利用	この履修モデルは自分の将来の夢が一番近づくことができる 技術が内容を身につけていく
	助詞の欠落	これまでパソコンの勉強したことのない
接続詞の誤用と多用	はじめは簡単な問題でもつまづくことが多かった。しかし、計算に慣れていない私は、間違いを見つけるのに時間がかかった。しかし、苦しい日々を乗り越えて解き終えた時は達成感を感じていた。	
指示語の多用	この履修モデルでは情報学を広く学ぶことができる。これを学ぶことで将来に活かせることが沢山あり、そこで学んだことを使った仕事がしたい。	
体言止め	それには、3つの理由がある。1つ目は、情報学を教える教員になりたいから。	
	例えば、英文学の人が自動翻訳プログラムを作成するなど。	
一つの単語の多使用	私は、6つの履修モデルの中でクラウドエンジニアという履修モデルを考えている。6つの履修モデルはそれぞれの分野の基礎から発展まで幅広く学ぶことができる。ここで、6つ履修モデルの概要を説明する。6つの履修モデルは将来就きたい職業や目標に沿った履修モデルである。	
	わからないところは図書館を積極的に利用することで、わからないところを作らないようにしている。	

1.3. 大学生のライティングの課題

1.1.1と1.2で示したように、学生から提出される文章の中には、大学生の作文として不適切なものが少なくない。実際に技術文書演習では上記で指摘した誤りが文章全体にみられる学生が毎年約3分の1程度存在する。

学生のライティングは3つの課題に大別される。1つ目は小学生のころから指導されるような作文の体裁が整っていないものである。例としては、段落やそれに伴う字下げ・改行がされていないもの、文末表現において常体と敬体が混在する文章、体言止めで終わる文章、必要以上に接続詞を入れる文章などが挙げられる。2つ目は出典の記載がないコピーアンドペースト（以下、コピペ）が疑われるものである。3つ目は文章の内容が主題に沿っていないものである。

1つ目の課題は小学校からの義務教育の中で身に付けてきているはずの知識であり、それらが定着せずに大学へ進学している現状を示している。2つ目の課題は小・中・高校の授業の中で引用の指導を受けたことがあるかないかという差が大きい。出典や引用を大学で初めて学ぶ学生も多いため、経験の差によるものであると考えられる。3つ目の課題は課題指示への読解力が関わる。読解力は「書く」と大きく関係するため作文に関する課題の解決には必要な能力であり十分に留意する必要がある。

これらの課題を踏まえ、学生の大学入学前の作文経験について調査を行い、実態に伴ったライティング学習支援への取り組みと結果について報告する。

2. ライティング経験の調査

大学に入学前に、学生は少なくとも小・中・高校で作文経験を積んできている。しかし、大学教育が始まって早々にレポートや課題など「書く」ことにつまづいている現状がある。教員からも「学生の作文の質が低下している」と危惧する声が上がっている。そこで作文経験という観点から、2019年度入学の大学3年生（以後、大3年生）と令和元年での大学教員の平均年齢である50歳前後[4]の大学教員に関して、それぞれの小・中学での学習指導要領の内容を比較する。なお、本稿では高校は比較対象には含めない。理由として高校は学校の種類が複数あり、それぞれにカリキュラムが異なるためである。工業高校では普通高校とのカリキュラムに差があり、主要教科の時数に差がある。また高校では文理選択があるため科目時数の比較が難しい。よって、今回は義務教育であり授業時数の比較が行いやすい小・中学の学習指導要領の比較を行う。

また学習指導要領について、大3年生は平成19年度（平成20年3月告示）の学習指導要領を参照する[5][6][7][8]。大学教員については前述した平均年齢を踏まえて、小学校は昭和43年度（昭和46年4月施行）を参照し[9][10]、中学校は昭和44年（昭和47年4月施行）を参照する[11][12]。

2.1. 授業時数

学習指導要領では、各科目ごとの授業時数を定めている。授業内では教師から生徒への教授のほか演習も含まれるため、学校の中での学習時間として捉えることができる。表2は大3年生と大学教員の小学生時の学習指導要領の授業時数の比較である。文型科目と言われる国語と社会については、昭和46年（以降、S46）から平成20年（以降、H20）の間で合わせて312時数減少している。国語に限ると142時数減っており、1時数45分であるため小学6年間で学習時間に106.5時間の差があることになる。

また、表3は同対象の中学生における学習指導要領の授業時数の比較である。国語は140時数の差がある。中学は1時数50分であるため、時間にして117時間の差がある。文章としての質の低下を訴える教員は多くいるが、学生の受けてきた教育時間と現在の大学生の教育時間では小・中学校の9年で220時間以上の差があるためだと判断できる。

表 2 昭和 46 年(S46)と平成 20 年(H20)の科目数および各科目授業時数の比較

区分	第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		第 4 学年		第 5 学年		第 6 学年		総 授 業 時 数			
	S46	H20	S46	H20	S46	H20	S46	H20	S46	H20	S46	H20	S46	H20	増減 (H20-S46)	
各教科の 授業時数	国語	238	306	315	315	280	245	280	245	245	175	245	175	1603	1461	-142
	社会	68	0	70	0	105	70	140	90	140	100	140	105	663	365	-298
	算数	102	136	140	175	175	175	210	175	210	175	210	175	1047	1011	-36
	理科	68	0	70	0	105	90	105	105	140	105	140	105	628	405	-223
	音楽	102	68	70	70	70	60	70	60	70	50	70	50	452	358	-94
	図画工作	102	68	70	70	70	60	70	60	70	50	70	50	452	358	-94
	家庭	0	0	0	0	0	0	0	0	70	60	70	55	140	115	-25
	体育	102	102	105	105	105	105	105	105	105	90	105	90	627	597	-30
	道徳	34	34	35	35	35	35	35	35	35	35	35	35	209	209	0
生活		102		105		0		0		0		0	0	207	207	0
外国語活動										35		35	0	70	70	0
総合的な学習の時間		0		0		70		70		70		70	0	280	280	0
特別活動		34		35		35		35		35		35	0	209	209	0
総 授 業 時 数	816	850	875	910	945	945	1015	980	1085	980	1085	980	5821	5645	-176	

※斜線は、S46年の学習指導要領にない科目

表 3 S47 年と H20 年の科目数および各科目授業時数の比較

区分	第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		総 授 業 時 数			
	S47	H20	S47	H20	S47	H20	S47	H20	増減 (H20-S47)	
各教科の 授業時数	国語	175	140	175	140	175	105	525	385	-140
	社会	140	105	140	105	175	140	455	350	-105
	数学	140	140	140	105	140	140	420	385	-35
	理科	140	105	140	140	140	140	420	385	-35
	音楽	70	45	70	35	35	35	175	115	-60
	美術	70	45	70	35	35	35	175	115	-60
	保健体育	125	105	125	105	125	105	375	315	-60
	技術・家庭	105	70	105	70	105	35	315	175	-140
	道徳	35	35	35	35	35	35	105	105	0
	特別活動	50	35	50	35	50	35	150	105	-45
	外国語	140	140	140	140	140	140	420	420	0
	総合		50		70		70		190	190
総授業時数	1190	1015	1190	1015	1155	1015	3535	3045	-490	

※斜線は、S47年の学習指導要領にない科目

2.2. 指導内容

差があるのは、授業時数だけではない。指導内容においても違いがある。小学生の国語の学習指導要領には、聞く・話す・読む・書くの四技能それぞれについての指導指標が示されている。ここでは作文経験に着目し、「書く」という項目を比較する。なお、各指導内容には項目(1)と(2)があり、(1)にて主な指導内容、(2)にて(1)をどのような言語活動と関連させて指導するのかが記されている。本稿では指導内容に着目するため(1)の内容のみを取り上げて比較する。

S46では各学年ごとに指導内容が記載されていたが、H20では1・2年生でまとめるなど2学年ごとに指導内容が記載されている。二つの年代で大きく異なるのは、前置きの文章である。S46では「作文の指導」と明記されているが、H20では「書くこと的能力」とされている。その違いが大きく表れているのが、S46の第2学年のカとH20のオである(表4)。S46では

表 4 小学校低学年での「書くこと」の指導内容比較

書くこと	
昭和46年	平成20年
<p>第1学年 (1) 作文の指導については、次の事項について指導する。 ア 書くことに興味をもつこと。 イ 書く事がらを見つけること。 ウ 聞いたり読んだりしたとおりに、やさしい語や文を正しく書くこと。 エ 経験したことなどの順序をたどって書くこと。 オ 事がらを考えながら、語と語とを続けて簡単な文を作ったり、文と文とを続けて簡単な文章を書いたりすること。 カ 文章を書くために必要な文字や語句を身につけるようにすること。 キ 書いた文や文章を読み返す習慣をつけること。</p>	<p>(1) 書くことの能力を育てるため、次の事項について指導する。 ア 経験したことや想像したことなどから書くことを決め、書こうとする題材に必要な事柄を集めること。 イ 自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。 ウ 語と語や文と文との続き方に注意しながら、つながりのある文や文章を書くこと。 エ 文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いなどに気付き、直すこと。 オ 書いたものを読み合い、よいところを見つけて感想を伝え合うこと。</p>
<p>第2学年 (1) 作文の指導については、次の事項について指導する。 ア 進んで文章を書こうとすること。 イ 何が最も書きたいかを考え、そのなかで書く事がらを見つけて書くこと。 ウ 聞いたり読んだりしたとおりに、文や文章を正しく書くこと。 エ できごとの順序をたどって書くこと。 オ 内容がよくわかるように、文と文との続き方を考えて文章を書くこと。 カ 文章を書くために必要な文字や語句を増すこと。 キ 書いた文章を読み返して、まちがいなどに気づくこと。</p>	

小学校低学年から「書く」ことに焦点があてられている。一定量の語彙を獲得しなければ作文が出来ないため、低学年のうちから語彙を増やすことが指導内容に入れられている。一方 H20 では語彙を増やすという指導の記載はなく、「書く」という活動の中で「読み合う」「伝え合う」という書く以外の活動を指導内容に含み、他者との相互レビューを取り入れている。

次に、小学校高学年の「書くこと」の指導内容を比較する(表5)。S46では、書くことを生活や学習に役立てることや、辞書の利用を指導している点が特徴と言える。H20では、収集や整理、事実と簡素、引用・図表・グラフを用いることが書くことの指導の中に組み込まれている。また、低学年時と同様に発表し合う・助言し合うという相互レビューが記載されている。

表 5 小学校高学年での「書くこと」の指導内容比較

書くこと	
昭和46年	平成20年
<p>第5学年</p> <p>(1) 作文の指導については、次の事項について指導する。</p> <p>ア書くことによって自分の考えをはっきりさせること。</p> <p>イ必要な事ごらを観点ごとに整理して文章を書き、生活や学習に役だてるようにすること。</p> <p>ウ主題や要旨の明確な文章を書くこと。</p> <p>エ段落のはっきりした文章を書き、また、段落と段落との関係がわかる文章を書くこと。</p> <p>オ文や文章の組み立てや語句の使い方に注意して書くこと。</p> <p>カ文章を書くときに辞書を利用しようとする。</p> <p>キ書いた文章を読み返して、叙述のしかたについていっそうくふうしてみる。</p>	<p>(1) 書くことの能力を育てるため、次の事項について指導する。</p> <p>ア考えたことなどから書くことを決め、目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して事柄を整理すること。</p> <p>イ自分の考えを明確に表現するため、文章全体の構成の効果を考えること。</p> <p>ウ事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。</p> <p>エ引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書くこと。</p> <p>オ表現の効果などについて確かめたり工夫したりすること。</p> <p>カ書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと。</p>
<p>第6学年</p> <p>(1) 作文の指導については、次の事項について指導する。</p> <p>ア文章を書くことによって自分の考えを深めること。</p> <p>イ必要な事ごらを落とさずに文章に書き、生活や学習に役だてること。</p> <p>ウ書く目的によってそなえるべき要件を知り、それらを落とさずに書くこと。</p> <p>エ必要に応じて文章を簡単に書いたり詳しく書いたりすること。</p> <p>オ文や文章の組み立てや語句の使い方についてくふうすること。</p> <p>カ文章を書くときに辞書を利用すること。</p> <p>キ書いた文章を読み返して、より効果的な叙述のしかたについてくふうすること。</p>	

次に、中学での「書くこと」の指導内容を比較する(表6)。小学校の指導内容と傾向が似ている。昭和47年(以降、S47)では、「書く」ことに焦点があてられ、文章を書くにあたって必要なことを指導内容として明記している。「事柄を落さず」「はっきりわかる」「適切に使う」などからは文章作成において正確性や明確性を求めていることがうかがえる。また、「語句を豊に」とあり、小学校から継続して語彙を増やすことが指摘されている。また、中学2年頃から「材料」「事実と意見を区別」「根拠のある材料」といったフレーズがあり、資料や文献を使った文書作成の指導が始まっていることがうかがえる。H20では、中学1年から「材料を集め」「集めた材料を分類」「根拠を明確」というフレーズが使用され、S47よりも早く情報を取り入れて文章を書くということが指導されている。中学3年では情報収集として「取材」を行い文章を書くことが取り入れられている。そして小学校と同様、「互いに読み合う」「意見を述べ」「助言をしたり」といったことを指導内容に入れている。

表 6 中学校1年から3年までの「書くこと」の指導内容比較

		書くこと	
		昭和47年	平成20年
中1	(1) 作文は、次の事項について指導する。 ア 自分の考えを確かにして、進んで文章を書く態度を身につけること。 イ 場面や経過などがよくわかるように具体的に書くこと。 ウ 目的に応じて、要点を明らかにし、必要な事柄を落とさずに書くこと。 エ 書くこととする事柄を整理し、主題や要旨をはっきりわかる文章を書くこと。 オ 構想を立てて全体の組み立てを考え、段落に分けて文章を書くこと。 カ 文脈に即して、語句を適切に使って文章を書くこと。 キ 表記のしかたに注意し、くぎり符号などを適切に使うこと ク 書いた文章を読み返し、表現を確かめて、文章をよりよくする態度を身につけること。	(1) 書くことの能力を育成するため、次の事項について指導する。 ア 日常生活の中から課題を決め、材料を集めながら自分の考えをまとめること。 イ 集めた材料を分類するなどして整理するとともに、段落の役割を考えて文章を構成すること。 ウ 伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くこと。 エ 書いた文章を読み返し、表記や語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、読みやすく分かりやすい文章にすること。 オ 書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や材料の使い方、根拠の明確さなどについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりすること。	
	(1) 作文は、次の事項について指導する。 ア ものの見方や考え方を広くし、自分の考えを大事にして文章を書く態度を身につけること。 イ 事実と意見を区別し、材料を整えて、文章を正確に書くこと。 ウ 中心の部分と付加的な部分とに注意して、主題や要旨をはっきりわかる文章を書くこと。 エ それぞれの段落の役割を考え、全体の組み立てを整えて文章を書くこと。 オ 語句を豊かにし、文脈にふさわしい語句を選んで文章を書くこと。 カ 表記のしかたに慣れ、くぎり符号などを適切に使うこと。 キ 書いた文章を読み返し、目的に応じた効果的な表現をくふうする態度を身につけること。	(1) 書くことの能力を育成するため、次の事項について指導する。 ア 社会生活の中から課題を決め、多様な方法で材料を集めながら自分の考えをまとめること。 イ 自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にして、文章の構成を工夫すること。 ウ 事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと。 エ 書いた文章を読み返し、語句や文の使い方、段落相互の関係などに注意して、読みやすく分かりやすい文章にすること。 オ 書いた文章を互いに読み合い、文章の構成や材料の活用仕方などについて意見を述べたり助言をしたりして、自分の考えを広げること。	
	(1) 作文は、次の事項について指導する。 ア ものの見方や考え方を深め、自分の考えをまとめて文章を書く態度を身につけること。 イ はっきりした根拠のある材料を用いて、事実や意見を正確に書くこと。 ウ 論旨をいくつかの論点に分け、適切な組み立てによって文章を書くこと。 エ 目的や必要に応じて、それにふさわしい形態で書くこと。 オ 表現の効果を考え、語句の使い方をくふうして、文章を書くこと。 カ 表記のしかたに慣れ、くぎり符号などを適切に使うこと。 キ よい文章の条件を考えて文章をよりよくする態度と習慣を身につけること。	(1) 書くことの能力を育成するため、次の事項について指導する。 ア 社会生活の中から課題を決め、取材を繰り返しながら自分の考えを深めるとともに、文章の形態を選択して適切な構成を工夫すること。 イ 論理の展開を工夫し、資料を適切に引用するなどして、説得力のある文章を書くこと。 ウ 書いた文章を読み返し、文章全体を整えること。 エ 書いた文章を互いに読み合い、論理の展開の仕方や表現の仕方などについて評価して自分の表現に役立てるとともに、もの見方や考え方を深めること。	

3. 大学生のライティング学習支援

前章で示した小・中学校での学習指導要領の授業時数と指導内容の差から、近年の大学1年生は大学教員と比べて作文経験が少ないということがいえる。小・中学校時点の作文経験の差を埋め、大学入学時までに必要なライティングスキルを身につけようとするのであれば、授業外での学習時間の確保が必要となる。

3.1. 個別指導室における取組み

3.1.1. 添削指導

個別指導室では、学生と一緒に文章作成にあたってどのような内容を盛り込むかやどのように説明するかという構成や論理展開の熟考する。既に作成された文章についても添削する。文章作成での添削では、氏名や学生番号の位置、余白の意味と取り方、字下げと段落の意味と作り方、誤字脱字の指摘、助詞の誤使用についての指摘、接続詞の誤使用の指摘と適切な使用についての説明、常体・敬体の混用のチェック、体言止めのチェック、句読点の不適切な使用のチェックなどを1つ1つ確認し指摘する。

また学生が文章作成で多くつまづくタイミングとして就職活動の履歴書がある。履歴書を作成する上でも大学でのレポート作成と同様に、どのような内容をどのように伝えるのか、文章としての正しさや言葉の選択について熟考し、文章にしてみても添削を行い修正を繰り返すというを行う。

表 7 2021年度 作文講座

日付	項目	具体的な内容
9月1日	教科書『日本語練習帳』の内容の確認をI章～IV章まで各章ごとに確認	講座に参加する条件として『日本語練習帳』の読了を提示している 本の内容を復習しながら、各章について大事な箇所をピックアップし作文の基本事項をおさらい
	縮約のやり方と説明	教科書に縮約について書かれた項目があり、そこに書かれた縮約の方法を参加者と確認
	縮約の演習	毎日新聞の社説（2021年5月17日）を縮約 「デジタル時代の終活 引き継ぐ準備を考えたい」 819文字→246文字（3割に縮約） できたところまでを全員提出
9月2日	引用とコピペについて	『コピペと言われないレポートの書き方教室：3つのステップ：コピペから正しい引用へ』（山口裕之著）をもとに、スライドで引用とコピペの違いについてや引用の具体的な方法について説明
	前回縮約のフィードバック	9月1日の縮約内容を、全員の前で一人ずつ画面共有しながらフィードバック
	縮約の演習	朝日新聞の社説（2021年07月14日）を縮約 「死刑廃止30年 世界の歩み見て自問を」 1011文字→304文字（3割に縮約） できたところまでを全員提出
9月3日	前回縮約のフィードバック	9月2日の縮約内容を、全員の前で一人ずつ画面共有しながらフィードバック
	縮約の演習	朝日新聞の社説（2021年07月30日）を縮約 「温室ガス削減 具体策示して協力促せ」 1016文字→305文字（3割に縮約） できたところまでを全員提出
	前回縮約のフィードバック	提出された縮約をその場で、全員の前で一人ずつ画面共有しながらフィードバック

3.1.2. 作文講座

日々の個別指導室での添削業務に加え、技術文書演習の講義が始まる前に作文講座を開講しライティングの基礎的な予習サポートを行った。講座の具体的な内容は表7である。本講座は少しでもライティングの機会を増やし練習の場を設けることを目的にしているが、それと同時に技術文書演習も見据えている。技術文書演習は全15回の講義を3つのパートに分けており、①文章作成の基礎を復習するパート②文章の論理構成を学ぶパート③文書作成ツールの演習となっている。このうち①と②は1.1であげた教科書を使用する。よって講座では教科書の内容を確認し、それを踏まえながらライティングを行った。また、より多くの文

章に触れるため、参加者全員の添削を全員に見せながら行った。他者の文章を自身の文章と比較できるように、どういった指摘を受けて、どこをどのように変えているのかということをも細かく説明するようにした。

4. 考察

本章では作文経験の少なさから学習指導要領で身に着けるべきライティング力を持ち合わせていない学生に対して行った取り組みについて考察する。

4.1. 添削によるライティング力の向上

日々、学生の添削を行う中で文章自体が悪化するということはほぼない。添削によりみられる文章の変化は、体裁が整うといった初歩的なことから表現や言葉選びのコツを掴み文章の質の向上などがある。しかし、添削と書き直しを繰り返しても改良が見られにくいものもある。例えば、接続詞や助詞、また授受表現である。これら全ての項目については、前後の文章や語によって使い方を見極めなければならず指導に注意が必要である。この見極める力は、読んで判断する力と捉えられる。すなわち読解力を要するため、ライティングにおいては読解力の向上が必要不可欠といえる。

接続詞や助詞は、日本語母語話者では感覚的に使用する学生が多く注意を払うという経験や意識が薄い。そのため「なんとなく」の感覚で使用していると考えられる。添削では注意が必要という意識づけと接続詞や助詞の使用法や意味を1つ1つ理解させる必要がある。また、添削により比較的短時間で修正が可能な内容としては、体裁や論理展開など初歩的で型がある程度決まっているものである。清道[13]によると、高校生を対象として意見文を書く際の型を提示したところ、短期的に書く力が向上したとしている。体裁という文章の型は学生にとっても分かりやすく改善しやすい点であり、ライティングを苦手とする学生にはまず型の提示から示すのがよいと考えられる。

また添削は1回で終了となることは少なく、添削を返して学生が修正してまた添削をしてというラリーを複数回繰り返す。西垣[3]は思考を深めるためには書くという作業が必要であり、学生が書き教員が読むという教員と学生とのコミュニケーションがそれを深めるとしている。教員による添削と学生による修正のラリーはライティング力の向上とともに大学での学びを深めるということからも添削指導の意義がうかがえる。

4.2. ライティング指導に際しての留意点

学生のライティング力の向上には、自身の文章に対する懐疑的な見方や批判的な見方を持てるか否かが重要である。大学における文章作成に関わる科目では、文章を書くための基本事項やテクニックを伝えることが主であり、自身の文書への内省を意識づけるという部分は加味されていない。自身の文章を見つめなおす作業は、履歴書や卒業論文のような相手に伝える文章を書く上で必要な工程である。この工程の重要性に早く気づくことができればライティング力は伸びやすくなる。

自身の文章を見つめさせるという意図のもと、技術文書演習では学生同士でのピア・レビューを取り入れているが、教員側の意図に反することが多い。現在は様々なツールを活用しながら匿名で他の人の文章に対し客観的な指摘を行える環境が整ってはいるが、学生自身のライティング力によっては誤った指摘をしてしまったり、同学年という気まづさか

ら指摘が当たり障りのない曖昧なコメントに止まるなどの課題がある。実際に仁科[14]のアンケートでは、工学部の学部2年から修士2年の学生に「学生が考えるライティング力の向上に効果がある方法」を質問しており、全学年で「同級生の書いたものを見たり読んだりすること」については評価が低いという結果であった。逆に「教員が書いたものを見たり・読んだりすること」は評価が高かった。つまり同級生の文章はあまり参考にせず、教員の文章や指摘・添削を参考にする傾向がある。これを踏まえると、学生同士でのピア・レビューの取り入れ方は教員側で相当工夫をする必要がある。

5. おわりに

大学のライティング科目は、大学入学時でのライティング力の差が大きい場合、同じ講義の中で全ての学生に対して適切な指導を行うは難しい。4.1にてライティングには読解力が関わることを示したが、例えばリーディングスキルテスト[15]のような読解力をはかるテストを利用したクラス分けが有効だと考える。これによりレベルに合わせた適切なライティング指導を行うことができる。

大学生の中には義務教育で身につけるべきライティング力を持ち合わせていない学生がいるが、彼らは自他の文章の誤りや論理の破綻に気づくことが難しい。まずは教員側でそのような学生に対し、作文学習に関するサポートの必要性に気づかせることが必要である。加えて授業外でのサポートは必須である。大学の講義は全15回週1回という頻度であるが、これではライティング力の向上としては時間的に少ない。学生自らが自身のライティングの課題に気づき、不足しているライティング経験を補うことが求められる。そのサポートとして個別指導室による添削や作文講座の存在は必要である。

参考文献

- [1] 大野晋, 『日本語練習帳』, 岩波新書. (2019)
- [2] 福地 健太郎, 園山 隆輔, 『図解でわかる! 理工系のためのよい文章の書き方 論文・レポートを自力で書けるようになる方法』, 翔泳社. (2021)
- [3] 西垣順子, 大学におけるライティング教育をめぐる心理学研究の役割—アカデミックライティング教育の現場に対する批判的検討を踏まえて—. 心理科学, 32 巻 1 号, pp. 1-8, 2011.
- [4] 文部科学省. “令和元年度学校教員統計調査(確定値)の公表について”.
https://www.mext.go.jp/content/20210324-mxt_chousa01-000011646_1.pdf.
- [5] 文部科学省. 『小学校学習指導要領』平成 20 年 3 月. (2007) .
- [6] 文部科学省. 『小学校学習指導要領解説国語編』平成 20 年 3 月. (2007) .
- [7] 文部科学省. 『中学校学習指導要領』.平成 20 年 3 月(平成 22 年 11 月一部改正) . (2007) .
- [8] 文部科学省. 『中学校学習指導要領解説国語編』平成 20 年 3 月(平成 22 年 11 月一部改正) . (2007) .
- [9] 文部科学省. 『小学校学習指導要領』昭和 43 年 7 月. (1968).
- [10] 文部科学省. 『小学校学習指導要領解説国語編』昭和 43 年 7 月. (1968).
- [11] 文部科学省. 『中学校学習指導要領』昭和 44 年 4 月. (1969).
- [12] 文部科学省. 『中学校学習指導要領解説国語編』昭和 44 年 4 月. (1969).
- [13] 清道亜都子, 高校生の意見文作成指導における「型」の効果. 教育心理学研究, 58, pp. 361-371, 2010.
- [14] 村岡貴子, 鎌田美千子, 仁科喜久子, 『大学と社会をつなぐライティング教育』, くろしお出版, pp. 137-156, 2018.
- [15] 一般社団法人 教育のための科学研究所. リーディングスキルテスト.
<https://www.s4e.jp/>. (2022 年 3 月 13 日閲覧)